琉球大学学術リポジトリ

# 商業の見方・考え方を働かせた探究活動での授業改善の実践事例?商業科目における多様な生徒が学びに向かう授業を目指して一



| メタデータ | 言語: |
| --- | --- |
| | 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 |
| | 公開日: 2023-05-16 |
| | キーワード (Ja): |
| | キーワード (En): |
| | 作成者: 金城, 寛史 |
| | メールアドレス: |
| | 所属: |
| URL | https://doi.org/10.24564/0002019860 |

# 商業の見方・考え方を働かせた探究活動での授業改善の実践事例

## ―商業科目における多様な生徒が学びに向かう授業を目指して―

金城　寛史

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻・県立具志川商業高等学校

### 1．　はじめに

筆者が目指す教育とは，体験的な活動を通じ，多様な生徒各々に学びがある教育である。文部科学省（2018b）は，探究の見方・考え方を働かせることについて「生徒は，①日常生活や社会に目を向けた時に湧き上がってくる疑問や関心に基づいて，自ら課題を見付け，②そこにある具体的な問題について情報を収集し，③その情報を整理・分析したり，知識や技能に結び付けたり，考えを出し合ったりしながら問題の解決に取り組み，④明らかになった考えや意見などをまとめ・表現し，そこからまた新たな課題を見付け，更なる問題の解決を始めるといった学習活動を発展的に繰り返していく。」と述べている。また文部科学省（2018a）では「商業の見方・考え方とは，企業活動に関する事象を，企業の社会的責任に着目して捉え，ビジネスの適切な展開と関連付けることを意味している。」と述べている。実習連携校にて実習を行った際，教職員の疲弊と生徒の困り感を実感した。商業高校の入学者は，学力・家庭環境・経済力の面で多様化している。また，教科「商業」の授業は検定取得指導へ偏っている傾向がある。そこで「伝統的な授業」から「主体的・対話的で深い学び」へのスキルチェンジを狙いグループ学習の有効性を探った。商業の見方・考え方で体験的な活動を行い，学びに向かうことを狙いとしテーマを設定した。中間報告は実習でのフィールドワークを含め，グループでの探究活動が多様な生徒相互に学びの効果があるかを検証する。本研究が商業科における授業改善の一助になればと願う。

### 2．　研究方法

(1) 授業対象：A 高校 1 年 A 組 30 名（男子 5 名女子 25 名）

(2) 実施時期：令和 4 年 9 月 5 日～9 月 16 日（10 日間・授業時間 8 時間）

(3) 研究対象：クラス全員。困り感のある生徒に焦点を当て，グループ学習での効果を調べる。

女子生徒 A：マネージャー同士の生徒 B と仲がいいが，他グループから弾かれた生徒 C が中に入り人間関係が崩れたため，グループワークにストレスを感じている。

男子生徒 Z：日本語支援が必要な生徒。学習に対する意欲は高く授業態度も良いが，教師の意図が読み取れないこともある。決まった友人と行動。

女子生徒 D：日本語支援が必要な生徒。学習に対する意欲は低く，理解できない部分があると諦める傾向がある。ダンス部に所属。ヘアメイクに興味がある。

(4) 分析方法

①教師の見とり②TiPS シート③生徒記述にて行う。

なお，TiPS シートとは，谷本薫彦氏（岡山県総合教育センター指導主事）が設計した図 1 のような振り返りシート「まなびの地図 Timelapse Positioning System」である（ 図 1，谷本（2019），以下 TiPS と記述）。

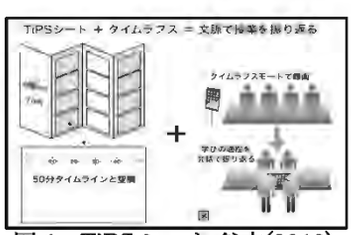


図 1　TiPS シート 谷本(2019)

## ３．　授業の実際と考察

(1) 授業実践内容　１年ビジネス基礎　８時間（当初６時間計画であったが２時間追加した）
実教出版　ビジネス基礎　８章　身近な地域のビジネス P. 187-195

| 時間 | 教科書内容 | 授業内容 |
|---|---|---|
| 1 | 1 さまざまな地域の魅力と課題 | 反転授業の説明・授業計画の説明 |
| 2 | １地域の現状 | グループ分け・訪問場所選定・Teams 使用 |
| 3 | ２地域活性化の動き | TiPS の説明。反転授業の実践 |
| 4 | 「先生ばかりのマンション」 | コミュニケーショントレーニング |
| 5 | 身近な地域のみどころ再発見 | グループ活動・地域マップの作成 |
| 6 | 2 地域ビジネスの動向<br>１地域密着型ビジネス<br>２地域の伝統産業<br>３地域の魅力を発掘するビジネス | 事前学習→ペア学習→グループ活動→発表→まとめ→振り返りの実践<br>発表課題<br>課題 1:乗り物を活用した新しいビジネスのアイデア<br>課題 2:地域通貨で地域経済の活性化を支援する事例<br>課題 3:スポーツクラブ運営ビジネスの事例<br>課題 4:コミュニティ・ビジネスの事例<br>課題 5:地域伝統産業の新しい取り組み事例<br>課題 6:魅力を発掘するビジネスについての事例 |
| 7 | 身近な地域のみどころ再発見 | 地域マップ作成・グループ活動 |
| 8 | | 作成した地域マップの発表 |

(2) フィールドワークについて

内容：教科書 P196・197 実習「身近な地域のみどころ再発見～地域マップの作成～」

狙い：観光客の増加を主な目的とし，身近な地域の見どころ紹介地域マップを作成する。

方法：訪問場所・計画・役割分担はグループで決定し放課後や休日に各自で訪問する。
ターゲット設定・調査・テーマの設定をグループで行い，最後にまとめを発表する。

目的：グループで実際に地元の観光スポットを訪問し観光の視点で地元を観察し直接話を聞くことで課題を自分ごととして捉える。学習後の発表準備や発表を通じ，新しい気付きや発見を互いに共有できる。共通体験を通じ良好なコミュニケーションが促進され，発表を聴き自己の考えを持つことで思考のブラッシュアップが促進される。

①グループ編成の実際と考察・課題

【実際】自由に３・４名グループ決定。無理なく訪問可能なメンバー構成へ配慮。しかし，１グループは寄せ集めのグループとなり対話もなく無訪問。実習最終日に，そのグループの生徒 A に授業外で話を聞いた。思うように授業に参加できない思いと，人間関係のストレスを涙ながらに話していた。

【考察】実際からグループ編成は席変えと同様，生徒が安心・安全を確保する上で重要な要素だと捉えた。生徒へのアンケートや記述からは，生徒 A の悩みやストレス等は読み取れなかった。思考を表出しない，また，表出できない生徒の存在を認識し，実態把握を行う必要がある。

【改善案】生徒へ感じた違和感を，対話や行動観察で確かめ，各部と連携した情報収集ネットワーク構築が不可欠である。授業に人間関係を持ち込まない指導も必要だが，今後グループ編成について次のように配慮する。

ア．教科担当者間・担任間の連絡を密にし，生徒の実態を把握する。
イ．安心・安全に意見や考えを表出できるよう「否定しないで聴く」をコミュニケーション・トレーニングで体得させる。グループワークの導入にアイスブレイクを行う。
ウ．基本，授業毎にメンバーをランダムに決定し，誰とでも話せる風土を醸成する。
エ．単元で数時間同グループになる場合は告知し，生徒と相談の上グループを編成する。

②フィールドワークの実際と考察・課題

【実際】訪問地(数)：北谷町美浜(２)・宜野湾市西海岸付近(２)・宜野湾市普天間宮付近(１)・中城村南上原(１)・西原町きらきらビーチ(１)・無訪問(１)
土日や放課後等に，各自調整の上フィールドワークを実施。
【考察】普天間宮のグループは，実際に宮司に話しを聞き，予定に無い普天間洞穴へ入るなど，自分たちで体験を深めていった。他のグループもインスタ映えするスポットや飲食物，時間を指定して楽しめる花火や夕日等の紹介などリアリティがあった。しかし，訪問先で観光に携わる方々へインタビューを行ったのは，普天間宮訪問グループのみであった。
【改善案】観光ビジネスの視点から，インタビューの内容を５W１Hで思考させ，フィールドワークへ送り出す必要があった。フィールドワークへの事前準備を練り直す必要がある。

③発表準備・発表の実際と考察・課題

【実際】地域マップは，A3の白紙に作成。自分たちがおすすめの場所へ，実際に訪問し魅力を伝えるという課題であった。グループでの対話や各自が自主的に役割を持つこと，自分達で作り上げる自由さと充実感に重きを置き，マップ作成の「型」はあえて指導しなかった。準備時間は２時間。

発表の評価は相互評価と教師の評価。教師は発表を聞く側のワークシートを評価することとした。１グループ５分程度発表し，質問へ回答する。ワークシートの項目は，〇魅力が伝わったか（５段階評価)，〇良い点，〇改善点，〇感想，とし評価基準は，A：項目全て記入，B：２つだけ記入，C:感想のみ，とした。ワークシートを撮影し，Teamsへ提出させた。
【考察】生徒Ｚのグループは，話したことのないメンバー同士，放課後残り楽しそうに対話し，発表の工夫を検討する様子があった。担任はこのような様子は今まで無かったと話していた。各グループのマップの出来は様々であった。生徒Ｄのグループは写真を貼るスペースにスマホを置き，スマホから写真を見せるなど，発想を転換した工夫があった。生徒は教師の想像を超える事を実感した。発表時のワークシート(図２)「商業的に作れていない」という記述から，既習の知識とフィールドワークが繋がっていない生徒の姿が読み取れた。発表準備・発表は主体的・対話的であったが深い学びに至っていないと感じられた。

良い点：未記入
改善点：商業的に作れてない。ターゲットの事を考えていない。表面的にしか発表とマップを作れていない。グループでちゃんと作れなかった。時間を考えて工夫する点を変えるべきだった。
感　想：最後の先生の話と，皆の発表を聞いて，深く調べるべきだったし，発表の台本とかも作っておけばよかったし，中学みたいに作った所が次はちゃんとここを改善したい！次は商業的に作りたい！

図２　発表時のワークシート生徒記述

【改善案】図２の生徒は，他の発表と教師のまとめから，自己を比較し次回への改善策を思考・表出している。しかし改善策実行の場がない。生徒が自己を振り返り，課題を認識したタイミングで教師の成長を促す発問や，一歩踏み込んだ課題の提供が深い学びに導くポイントだ。今後，共通体験を基に，学びを深めていくことを狙い，体験的な活動（Do）→振り返り（Check・Action・Plan）→体験的な活動（Do）の構成で深みのある学びへの導きを試す。また，基盤となる生徒の実態把握・専門的な知見・成長を促す発問等，教師のスキルアップを行う。

(3) 困り感のある生徒について

生徒Ｄ・ＺのTiPSの記述(図３・４)を分析し，高１・日本語支援が必要な生徒２名の困り感の共通点は「言葉の意味が分からない」であった。支援員のサポート体制はあるが教科書や級友の言葉の意味が分からなければ学びは深まらない。筆者の解決法は教師やサポーターによる個別支援であったが，生徒同士の協同的な学びによる課題解決を模索し２つの対策を実践した。

自分のいけんや人が言っていることが分からない時が多い。自分はいけんを考えられるけどそれを言葉とかぶんしょうにするのがにがて。
理解できていないぶぶんがあった。

図３　生徒ＤのTiPSへの記述（授業２回目）

大事な前後の文を考えてその言葉を相手に伝えることができてうれしかったが，言葉についての意味が分からなかったこと。
他の人の発表を聞いて少し意味が分からなかったので授業後に先生に聞いた。

図４　生徒ＺのTiPSへの記述(授業２回目)

【筆者の２つの対策】

①生徒Ｄ・Ｚへ，意味が分からない箇所をペア・グループ活動で質問するよう促した。メンバーへ「理解でき

るよう解説するのも学びになる」と協力を求めた。

②「傾聴・質問力」の必要性を体感させるため，コミュニケーション・トレーニングを実施。

【筆者の対策を受けての生徒の動き】

①生徒Ｄはメンバーへ質問し，教科書の漢字へルビ振りも始めた（メンバーが親しいのも影響有り。親しくない生徒とは対話が無い）。メンバーも説明を始めた。
生徒Ｚは授業後，筆者へ分からない箇所を質問し，説明を求めた。

②生徒Ｄのグループはコミュニケーション・トレーニングにて，制限時間内に正解できなかった。生徒Ｄは「自分がもっとちゃんと説明を上手にしていたら全問正解していたかも」（図５）と TiPS へ記述。

みんな，コミュニケーションゲームでちゃんとつたえあったけど，こたえが違うところが多くどっかでミスったことがわかりました。
自分がもっとちゃんとせつめいを，上手にしていたら，全問せいかいをしてたかもと思いました。

図５　生徒Ｄの TiPS への記述(授業４回目)

【考察】両名に共通な困り感は「話の意味が分からない」事である。その際，生徒Ｚは不安な表情で教師を向き，生徒Ｄは肘をつきノートを見つめて「授業を受けるフリ」をする。教師が気づかない学びの空白時間がある。伝統的な授業では点数に表出されるまで生徒の困り感を捉えられない。今回のグループ活動を中心とした実習では，生徒主体の活動・対話・TiPS から困り感を見とることができた。

【改善案】多様な生徒各々に学びがある教育の第一歩は，生徒の実態把握と自己を表出できる安心・安全の環境を整えることから始まる。実習ではコミュニケーション・トレーニングにて傾聴・質問する力の必要性を体感させ，基盤を構築した。授業でのグループ活動では，傾聴し質問するコミュニケーションを実践させた。観光地訪問の共通体験からコミュニュケーションを活性化させ，自己有用感を高めた。自己表出の基盤作りはできたが，多様な生徒各々に学びがある教育とするには，まだスタートラインに立った状態に過ぎないと考えられる。今後，授業設計を工夫し，各々の学びとなるような授業実践を行いたい。

## ４．　今後の研究に向けて

大学院での研究と実習を通し，授業や生徒に対する決まった「型」などは無いことを実感した。動画を撮影し，自分と生徒の姿を客観的に捉え，動画の中の生徒のつぶやきや姿を分析すると，教師主導での働きかけと協同的な学びでは，生徒の学びへの向かい方が違う事は明白であった。市川（2014）は学びには「基礎から積み上げる学び」と「基礎に降りてくる学び」があると述べている。多様な生徒各々に学びがあるとは「基礎に降りてくる学び」である。本県商業科では，体験や実践を通じ「基礎に降りてくる学び」の展開が可能だ。これは生徒各々の進路選択に応じた手厚い支援体制と，本県の観光施策に連動した観光教育の取り組みの面でも，普通科に比べ優位性や可能性がある。また今後，生徒の共通体験を素材に，チームで課題解決に向かうプロセスを通じた学びを提供するため， Do から始まる DCAP サイクルを素早く多く回転させる授業の工夫をしていきたい。その際，教師は，生徒の実態を把握し主体として捉え，適切にファシリテーションを行えるスキルも身につける必要がある。そして引き続き，探究活動によって多様な生徒相互に学びの効果が生じるのかを検証していく事としたい。

## 引用文献

市川伸一，2014,『学ぶ意欲とスキルを育てる―いま求められる学力向上対策―』小学館， 30.
谷本薫彦，2019,「TiPS シート＋タイムラプスで学習の振り返りをつぶやきから文脈へと導く研究」.
文部科学省，2018a,『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説商業編』実教出版.
文部科学省，2018b,『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説総合的な探究の時間編』学校図書.